

2024年 9月 23日

Tazaki 財団英国留学支援奨学金
留学報告書

所属	東京工業大学
現在の学年	修士二年
氏名	湯浅 翔太
渡航先国	グレートブリテン及び北部アイルランド連合王国
渡航先	UCL
渡航プログラム	Summer English Course for International University Students
渡航期間	3週間(2024年8月4日~2024年8月23日)

(以下に報告事項を記載)

留学の概要について

私は、2024年8月4日から8月23日の三週間にわたり、英国 University College London(以下、UCLとする)にて、English Course for International University Students に参加した。このコースは、UCL Center for Languages & International Education(CLIE)によって実施される、UCLの教育学・言語学の学部に対応する機関が主催している。このコースは、英語のスピーキング、リスニング、リーディング、ライティングの主要分野において、英語力を向上させることを主な目的としている。また、ロンドンの歴史的要所を訪問するアクティビティーを通して、ロンドンの分野の多様性を体験し、理解することをねらいとしている。

UCLは、オックスフォード大学、ケンブリッジ大学に次いでイングランドで三番目に設立された大学である。それまで、大学教育を受ける機会が英国国教会信者の男性のみに限定されていたが、人種、階級、宗教に関係なく学生を受け入れた、イングランドで初めての大学である。明治期には、伊藤博文なども学んだという。現在、UCLはQS世界大学ランキング(2014年)で世界のトップ10大学中5位にランクインし、最高水準の研究・教育機関として名高い。特に、今回のプログラムが実施されたUCL教育学部はQS大学ランキングでは、2014年から2024年現在まで、連続して一位を記録している。

三週間のスケジュールとしては、上記の目的に沿うように時間割が設定されており、平日の午前中(10:00~13:00)は、学生約13人で構成される小クラス内での英語の授業に参加する。午後の時間には、プログラム参加者全員が一堂に会して実施されるAcademic Lectureや、ロンドンの名所を巡るVisitが設定され、プログラム期間内にAcademic Lectureは週一回の3回、Visitは6回、実施された。

午前中の授業は、プログラムの初日に実施されたクラス分けテストによって分けられたメンバーとともに三週間、教室での座学が行われる。本プログラム全体の参加者が約80人であり、小クラスが6クラスだったため、一クラスは13人程度となっているようだ。本プログラム全体で、訪問先や授業で扱う内容は同じだが、その進め方や学生に求めるレベルはクラスごとに異なっていたようだ。講師は、クラス全体の英語力のレベルと、毎日の学生の授業に対するレスポンス・理解度を確認・観察し、次の日の授業内容や深度を調整し、臨機応変に授業のあり方を模索していたようだ。毎日の授業内容は、その日の授業の始めに説明され、前日の授業の内容を振り返りつつ、新たなトピ

ックヘスムーズに入っていけるように設計されていた。

授業の内容は、主に三つの軸で構成されていた。一つ目は、プログラムの最終週に実施されるプレゼンテーションとレポート執筆に向けて、アカデミックプレゼンテーションの作法や、学術的文章の書き方などの、英語圏の大学で講義を受け、研究を実施するために必要なスキルの学習である。プレゼンテーション並びに最終レポートは、ロンドン市民の実態に関する General research question に対する研究時プロジェクトを発表するものであり、ロンドン市民に関する何らかの一般的な仮説を設定し、プログラム期間中にロンドン市民に実際にアンケートとインタビューを実施し、アンケートを集計することで、その仮説を検証するという社会学的方法論の実践を体験するというものだった。すなわち、学問・研究活動として求められる、研究の問いの立て方、一般的な問いを明らかにするためのアンケートの設計法、プレゼンテーションやレポートの構成や作法、学術的な言葉遣いや英語表現、アンケート結果を分析し記述するための方法など、一般的に研究活動で要求される技能を学習した。個人的には、すでに修士課程に在籍し、学問的方法論についてはよく理解していたので、すでに知っていることも多々あったが、内容の理解というよりむしろ、英語論文での学術的表現をより多くストックすることができたことや、さらなるライティング力の向上、プレゼンテーションでの表現の幅を広げることができたことなどが主な収穫だった。また、理系の方法論とはことなり、アンケートによる集計は、質問文の訊き方や、回答のタイプ（Open Question なのか、多肢式なのかなど）によって得られるデータの質が変わってくるため、アンケートの方法論に関する議論は新たな学びが多かった。アンケートの質問文や形式は、プレゼンテーションのグループメンバーで議論し、答えやすいものになるように試行錯誤して練り上げた。また、ロンドン市民に実際にインタビューを実施したことは、学内の学生や先生以外の人とかかわる数少ない機会であったが、授業では得られない学びがあった。インタビューを実施したのは、最終週の小クラスの教室の近くの街中であったが、インタビューは我々が何者で、どんな目的でインタビューを行っているかももちろん知らない訳で、尋ねた人のうち半分ほどには断られてしまったが、そのようなタフながらも実践的な会話の機会を通して、自身の英会話力の現在地を知ることができた。インタビューでは、ネイティブの早い話に時々ついていけない時もあったが、意外と自分の問いかけも通じない訳ではないと自信をつけた面もあった。

二つ目の授業内容は、午後の Lecture や visit に対する事前学習と事後学習である。Lecture は毎週火曜日の午後に実施され、講義前の火曜日午前には、講義内容に関する語彙のフォローアップや学生との議論を含む事前学習を行い、講義後の水曜日午前には、講義で得られた知識に関するディスカッションやフィードバックを通して講義内容を深く理解できるようになっていた。Lecture の内容は、一週目は「記憶」に関するものであり、二週目、三週目は、ロンドンの破壊と再生の歴史や、グリーンスペースについてであった。講義は大講義室で実施され、緊張感のあるプレゼンテーション形式で実施され、「TED」を彷彿とさせるようなものであった。「記憶」に関する講義は、UCL の記憶の研究者による最新の暗記方法が解説され、どのようにすれば効率的に忘れない記憶を形成することができるか、わかりやすいたとえ話なども用いながら説明された。

三つめの授業内容は、Visit に対する事前学習と事後の振り返りである。訪問先は、Tower Bridge、Tate Britain Art Gallery、East End of London、Kew Gardens、: Boat Trip to Greenwich、Theatre visit: Lion King、そして初日の UCL キャンパスであった。小クラスでの授業は、基本的に各訪問先に関する動画を見て、その動画で聞き取れたこと、わかったことを数人のグループで話し合うといった形で進められた。それと同時に、動画の中で使われている表現や単語を学習し、語彙力を強化した。英国や UCL の学生文化に関する話題や、芸術に関する表現・概念、建築物・ガーデン・橋梁などを表現するための単語やイギリスにおけるそれらの重要性、シェイクスピアからの演劇の歴史など、それぞれの訪問先にまつわる話題を起点にしながら、様々な話題に関する英単語の習得・概念の理解ができた。単に英文を読み、単語を暗記するといった学習法以上に、語彙やその背後にある概念を有機的に理解することができたと感じている。IELTS のスピーキング問題やその他の場面で求められる、「特定トピックに関する表現の幅」を広げるために、このような有機的な学習方法が有効だと感じた。今回の経験を活かして、自分の英語学習法をアップデートしていきたい。



図1(左): Wilkins Building and Main Quad、図1(右): UCL 教育学部のキャンパス

留学中の勉学、研究についての感想

プログラムを通して、小クラス内での授業は自分が想像していたより難しくなく、講師が学生に問いかけた質問に他の学生がなかなか答えない中、自分が答えを発言する、といった場面が多々あった。これは、初日のクラス分けテストでのライティングが振るわなかったことや、クラス内に日本人が多く、学生が発言をためらっていたことが原因として考えられるが、この点に関しては、プログラム途中でクラス変更の申し出をしてもよかったと後悔が残る結果となった。しかしながら、他のクラスも日本人が多いクラスがいくつもあり、このままのクラスでできる最大限の努力をしようと心を切り替えて授業に参加した。

授業内容に関しては、一日当たり数時間の授業時間の割に、多くの新たな単語、表現が出現し、ライティング・リスニング・リーディング・スピーキングとさまざまな角度から英語に接するため、授業で扱った題材を復習することで、楽しく英語学習ができた。意欲的に取り組む意思があれば、前日の夜に自主学習で覚えた英語表現を次の日の授業内のディスカッションや先生への発言ですぐに使うことができるので、自分の発言の中での表現の幅が広がるのが実感でき、非常に楽しく英語を学習することができた。

研究プロジェクトは、そもそも自身の専門分野での留学ではなく、具体的な研究に参画できたわけではないので、研究内容に関する学びに関して特別言及できることはない。しかしながら、将来的に海外大学へより長期の留学をすることになった場合、今回の経験は大きな糧となることだろう。英国大学の授業への参加の仕方、学生や先生とのコミュニケーション、寮での生活など、海外大学の生活をリアルに体験することができたことが非常に貴重な体験だったと感じている。例えば、プログラム冒頭の授業の中で、イギリスの有名大学で実践されている”Independent learning”とは何か？という話題が取り上げられた。Independent learning とは、学習者自身で講義で扱うトピックについてより深く学習することを意味し、大学の図書館や学科のスタッフの力を借りて、自ら読むべき文献や資料を探し出し、学びを深めていくことを指す。学生はこの Independent learning に、一日あたり約4～6時間を費やしているという。講義(教授による一方向的講義)やセミナー(小グループの議論を伴う授業)では、この事前・事後の個人学習を前提として進んでいくため、学生は大学の講義室外での学習に多くの時間をかけるのだ。この点で、日本の大学との大きな差を感じた。日本の大学でも、もちろん予習・復習が推奨され、高校での自習とは異なる自主学習が要請されるが、英国大学ではそれよりはるかに厳しい水準の学習が求められるのだと感じた。ここまでに前述したように、Lecture と Seminar をうまく組み合わせ、Seminar では、インプットしたことを他者へ積極的にアウトプットし、自分の考えや意見を細かくフィードバックしながら、Lecture でより深い内容へ理解を進めることができるというシステムは、各自の自主学習がないと成り立たないものであり、このような点が日本人学生が海外大学へ留学した時に適応を迫られ、そして最終的に身に着けているポイントなのではないだろうか。日々の授業の中では、常に先生に問いかけられる可能性があり、そのレスポンスとしてもまとまった文章で返すことを求められるため、自分の中でそのトピックに関して正しい認識をし、事実を

整理し、考えをまとめておく必要がある。このように、海外大学での学びについて体験することができ、非常にためになった。

留学中に自らの国際感覚や異文化適応力を磨くことのできた経験について

当初の予想に反し、本プログラムには日本からの学生が多く参加し、特に日本人同士でグループを形成する人も多かった点は残念であった。異国の地で英語のみでサバイブするというはかなわなかったが、日本人学生とも基本的に英語でのコミュニケーションを心掛けた。そのため、Visitの際に、ほかのクラスの日本人以外の学生とも積極的に交流を試みた。イギリス人との交流は、クラスの先生方やVisitの際のガイドの方など、機会は少なかったが、ガイドの方の丁寧な解説を聞き、都度質問をして会話をすることができた。特に、Kew Gardensへの訪問の際に、高山植物を展示しているビニールハウスの建物の気候制御の仕組みに関して、ガイドの方に込み入った話まで伺うことができ、最後に参考文献もご教示していただいたほど、親切に対応していただいた。自分の英語表現に対する自信をつけた出来事であった。ほかにも、初日に他クラスの講師の方とUCLのキャンパスツアーをしている際にベンサムをきっかけに哲学や思想についてちょっとした雑談をした方がいるのだが、その後もその講師の方とはGreenwichへ向かう船のデッキ席でお子さんを交えてお話ししたりした。シアターへのVisitで閉幕後にトイレに行くために人の流れに逆らってトイレに向かっていた時に、「もう劇は終わりだぞ！大遅刻だな！」と冗談を言われるなど、気に掛けてくださっていたようで、多くの学生が参加する中、特段交流のない他クラスの学生を覚えていたということを踏まえると、積極的に会話を試みて自分のことを知ってもらっていたことが功を奏したのかもしれない。

また、寮のフラットメイトには、香港人とスペイン人がいて、キッチンなどで一緒になった際には、雑談をした。特に香港からの学生とは、フットボールの話で盛り上がり、たびたび雑談した。また、その人のつながりで、Visitの移動中に中国からの学生数人と雑談した。やはりスポーツの話題は世界共通であったが、ほかには中国の昨今の経済状況や博士課程取得の必要性などの話もした。中国にはやはり、海外の大学などへ進学し、より学びを深めて、学問を究めたいという意欲の高い学生が多いそうで、日本の大学生との相違を感じざるを得なかった。

留学プログラムの中で出会った人ではないため言及すべきか悩ましいが、UCLの寮にチェックインする前に前泊していたホステルで出会ったフランス人と友達になり、プログラム期間中に何度か出かけたり、食事に行ったりした。彼は本プログラムとは関係ない人間だが、英語が堪能なため、プログラムに欧米の人が少数しかいないとわかってからは、ヨーロッパをよく知る友達として、いろいろな話をした。話していて楽しい人で、さらに物知りなので、多岐にわたるトピックを色々話すことができ、非常に楽しく会話した。個人的には今回の留学に参加して最もよかったと思える出来事の一つが彼との出会いであり、留学プログラムではあまり多く体験できなかった「異文化交流」をすることができたことが非常に良い出来事だった。スポーツパブでプレミアリーグを観戦したり、カムデンを散策したりした。そして幸運なことに、プログラム終了後にロンドンからパリに行った際に、たまたま彼も同じ日にフランスへ戻る日だったため、一日パリの案内もしてもらった。その後も、オンラインチャットで連絡を取り続け、雑談するほどの仲になった。来年、日本に来る予定があるらしく、その時は代わりに自分が案内しようと申し出たほどである。ともかく、留学プログラムに応募しなければこの出会いはなかったわけで、深い友情を築けたことが自らの国際感覚や異文化適応力の涵養につながったと考えると、言及に値すると判断した。



図2: 寮のキッチンで自炊をしている様子

今回の留学経験を将来にどのように生かし、社会に貢献していくか

私は現在、土木工学を専門とする修士課程二年の学生であり、来年度からは国内の建設会社で勤務する予定である。配属は未確定であるが、現場・設計・研究のいずれの職種に従事するとしても今回の留学経験は大いに生かされると確信している。イギリスは、産業革命が始まった地であり、訪問地の一つである Tower Bridge をはじめとして地下鉄、トンネルなどで、土木分野でのパイオニアであったという歴史がある。そのような地で、多くの土木構造物を実際に訪れ、その実際の姿を知ることができたことは大きな財産となるに違いない。特に、Tower Bridge が実際に跳ね上がり、船を通している場面に居合わせたとき、そのダイナミックさを一目見ようと観光客が詰めかけ、大盛況だった光景を目にしたときや、ミレニアムブリッジを往来する人々が橋の真ん中で写真を撮ったりして楽しんでいる様子と見るにつけ、町の中で土木構造物が主役となって人々を魅了していることに非常に感動した。また、地下鉄やバス、タクシー、シェアサイクル、国鉄等の交通システムや、ロンドン市内の街並みや建築規制、郊外での住宅風景・田園風景など、都市や国土利用についても、多くの知見を得ることができた。土木技術者として、都市に携わる者として、非常に有意義な経験をする事ができた。

また、将来的に海外で土木技術者として働くことを検討するうえで、今回の留学とイギリスや、留学期間後に訪れたその他のヨーロッパの国々で過ごした経験は重要な材料となると思う。労働者と経営者との関係性や、労働に対する考え方とそれらの根底にある法律・制度、河川の特性や水資源の日本との違い、地震がないために建設が可能な特徴的な構造物など、多くの点で日本と異なることが分かり、海外で実際に労働した場合のリアリティーや、イギリスでの地理的特徴を体感することができた。

加えて、インタビューやその他の現地の人との会話などを通して、エネルギーや環境配慮に関して、ヨーロッパの人々の自然や技術に対する考え方や接し方を知ることができた。イギリスだけでなく、留学期間後にフランスやオランダ、ドイツ、ルクセンブルクを巡ったことで、各国の自転車文化や風力発電での取り組みなどを知ることができた。今後、より実感をもって欧州各国のエネルギー政策や環境問題への意識などの動向をウォッチすることができると思う。

今回の留学経験は、今後の国際的なコミュニケーションの場面で、相手とより深い関係を構築するために生かされるだろう。これまでの英語学習では、オンライン英会話での英会話や、ノンネイティブの留学生との英会話は行ってきたが、これらの環境では、特別な状況しか再現できないという限界があった。一方、留学というのは、実際に英語を使うしかない環境に身を置き、日常生活も食事、友人との雑談ですら英語を使うしかない環境を生きるということの意味する。たとえ自分の脳

のスイッチがオフの状態であったとしても、街中や電車内で話しかけられた際には英語を使う以外になく、英語がとっさに出てこないということは、自分の身の安全を脅かしかねないということなのだ。このように、必要に迫られて英語環境への適応が促進されるということもあるが、他方で英国の街中で他人に声をかけることをいとわない風土に影響されて、自分もよりオープンなマインドセットでいようとするようになることで、いろいろな人と英語でやり取りすることに抵抗がなくなることもあった。このように、異国の地に身を置き、実際に生活することで、リアルな生活の中での言語の使用を体験することができた。また、握手やジェスチャーなど、欧米特有の文化をリアルに体験したことで、単に会話するだけでは得られなかった言語外のコミュニケーションも理解することができた。このような経験は、国際的な仕事をするうえで重要な、信頼関係の構築に寄与する可能性があり、留学によって得られた大きな価値だと考える。



図3: Tower Bridge の跳ね上げ時に見物客が詰めかける様子



図4: ミレニアムブリッジ

その他

- ・休日には、ブライトンでプレミアリーグ開幕一週前のフレンドリーマッチを観戦したり、アビーロードでかの有名な横断歩道で写真を撮ったりした。
- ・平日の放課後にも、友達とロンドンの観光地を歩き尽くし、水曜午後の自由時間を使ってオックスフォードに出かけた。
- ・プログラム終了後から帰国便までの間、ヨーロッパの国々を周遊し、各国の歴史や都市の雰囲気を知ることができた。また、各地のホステルで、他の宿泊者と交流することができた。

謝辞

公益財団法人 Tazaki 財団様

このたび、Tazaki 財団様の奨学金受給者に選んでいただき、深く感謝申し上げます。今回の人生初の留学で多くの学びを得られたのは、ひとえに財団からご支援いただいた多額の奨学金のおかげです。特に、かねてより強く希望していた英国への留学の機会をいただき、充実した3週間を過ごすことができました。大学での授業に参加したことはもちろん、寮での生活や多くの方々との交流など、様々な貴重な体験をすることができました。

この留学を通じて、就職後に海外の大学で博士課程に挑戦するという選択肢が、より身近なものとなりました。今後も英語学習を継続し、国際的な視野を持つ人材となれるよう、尽力してまいります。最後に、私を支えてくださったすべての方々に心より御礼申し上げます。

東京工業大学 環境・社会理工学院 土木・環境工学系 土木工学コース 修士二年
湯浅 翔太